Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No. 103

目次

豊田市指定文化財
猿投神社木造千手観音菩薩立像の
平成修理を終えて　2・3

特別展「すすめ！タイム川ベラー
～とよたの川へ時間旅行～」　4・5

校庭の隅で静かに見守る
「菅沼邦三郎先生之碑」　6・7

博物館の種　8

新収蔵資料紹介
幕府から渡辺家への書状　9

埋蔵文化財調査速報
神明遺跡第 13 次発掘調査　10

民具調査だより 27　鉄瓶　11

企画展紹介
古い道具と昔のくらし　物語と民具　12

ISSN 0919 - 0120
20181211　No.103

猿投神社木造千手観音菩薩立像の平成修理を終えて

■仏像の搬送から清掃

仏像が運び込まれると、仏の顔を見ながら「やぁ、よく来たよく来た」と口に出して言ってみる。

梱包を開き、刷毛でホコリを払いながら各方向から痛み具合を確認する。努めてゆっくりと掃除をすすめ、修理前の撮影を済ませれば作業は一区切りである。しかし猿投神社の木造千手観音菩薩立像（以下、千手観音）は様子が違っていた。

等身大の立像は、我が工房に来る仏像としては大きいほうで、またこの像は榧の一木造りで内刳りは無い。榧は碁盤の用材として知られ、桧に比べてはるかに質量が高く、つまりこの像は大きく重い。もしも人手が充分でも、手作業での移動は危険である。作業はチェーンブロック（昇降機）を用いた像の移動に慣れることから始まった。

本題からは外れるが、仁王像のようなさらに大きな仏像の修理では、幾つかのチェーンブロックを用いて何人かですすめている。

■仏像の汚れ

像の移動が自在になり、千手観音の修復作業はようやく掃除へとすすむ。気長に２ヶ月ほどかけて表面の汚れを取り除いていくと、次第に鼻をつくような臭いも抜けていった。

誤解を恐れずに言えば、ウチに来る仏像は清潔ではない。仏像の表側にはチリ・ホコリ・スス、揮発したロウソクなどの油分、ほかにも経年の汚れが固着している。また仏像の胎内や台座の内側などの小空間には、小さな生き物が巣くうことも多い。昨今は無人の堂宇に害獣が住み着くこともあり、この千手観音が安置される山中観音堂も例外ではなかった。

この堂宇は、昔の神宮寺・現在の猿投神社の鬼門を守る御堂（室町時代の建築物）に修理を重ねたもので、このたび本尊千手観音菩薩が修理のために不在の間にも、氏子の方々による建築修理が行われた。

■猿投神社と観音堂と千手観音

猿投神社は、古くから本地仏を祀る神仏習合の形をとる仏教寺院としての側面を持っていた。その寺名を「白鳳寺」古くは単に「神宮寺」といい、その存在が記録に現れるのは 12 世紀中頃のことである。

一方本稿の千手観音は、様式的に 10 世紀に遡ることから、この頃にはすでに神宮寺は存在していたとも考えられている。

神宮寺は多い時で十六坊、江戸期には七院で構成される大寺院であったが、その伽藍も嘉永６年（1853）の火災で焼失してしまう。境内の北東に離れていた山中観音堂は唯一火災を免れ、神宮寺の残された仏像はこの御堂に集められることになった。

これらの仏像は明治元年（1868）「神仏分離令」を期に、仏画・仏具とあわせて観音寺（千洗町）に移されることになる。その後観音寺の火災（明治５年・1872）で数体を焼失するが、残った仏像は摂取院（猿投町）に移され、さらに再び山中観音堂に戻されている。

なお猿投神社の来歴については、『新修豊田市史 21 別篇美術工芸』各論「猿投神社における神仏分離と仏像」に詳しい。

また、同社に残る猿投神社文書『八講帳』（愛知県指定文化財）には、元禄２年（1689）に完了した千手観音の修理（以下、元禄修理）について記されている。

「***観音堂千手并脇手不動毘サ門再興　右本尊は行基※菩薩作也***」

※行基…奈良時代の僧

とあり、これは像の足枘に書かれている「行基菩薩作」（左枘）「不動毘沙門同作」（右枘）に比定され、奈良時代の作というのはともかく、本稿の千手観音は、今から 330 年ほど前の時代に脇侍の毘沙門・不動とともに仏師井上佐源次により修理が行われたことがわかる。

足枘の赤外線写真

修理前の写真

修理後の写真

■後世の修理と平成修理

平成修理では、元禄修理をきっかけとした興味深い問題点が見出されている。

本像の造立時期である 10 世紀後半には、脇手の組み付け方法は概ね確立されている。通例ならば合掌手上腕の裏側から背面にかけての、ちょうど礼拝する正面から隠れたところには、脇手を固定する仕口（しくち）が存在する。しかし本像では、その痕跡も見当たらないのである。

修理中の写真（右図）を見ていただきたい。上腕の外側が平面に削られるのは、元禄修理における井上仏師の加工であり、別に脇手 19 本を挿し込む座板をこの平面に矧（は）ぎ付ける仕口である（平成修理前に概ね脱落）。脇手そのものは、古様（平安期）の特徴を示す 17 本と井上仏師による補作 21 本が、それぞれ作風の違いはあるが通例のとおり左右各 19 本（合わせて 38 本）が揃い、すべて合わせると結構なボリュームになる。

修理中の写真

ところでこの写真は、脇手や化仏（けぶつ）を外した状態ではあるが、立脚のバランスを調えれば、十分に鑑賞に値する尊容をたたえ、当初は十一面観音であったとする見方にも頷ける。

元禄修理を機会として、四臂（しひ）の十一面観音から千手観音への改作が行われたことも考えられるが、しかし古様をしめす脇手 17 本の行き先がわからない。ほかの古像からの流用なのか、今のところ造像から元禄修理までの記録は皆無であり、あれこれ想像するばかりであるが、井上佐源次による修理は問題をはらみつつも現在の像容を形作る“要”となっている。

平成修理では他の作例に倣い、前から 6 本・7 本・6 本の 3 列をネジ止めで固定した。新事実が発見されたならいつでも取り外して考察できる状態である。

なお井上仏師はこの地方の仏像修理を多数手掛けており、その数は 6 件 25 体（十二神将を含む）におよぶ。詳細は『豊田市史研究七号』昌全寺聖観音菩薩坐像修理報告　−製作法の考察と享保修理の評価 -（平成 28 年）に纏（まと）めたので、興味のある方はご一読頂ければ幸いである。

（愛知仏像修復工房　横川耕介）

「すすめ！タイム川ベラー ～とよたの川へ時間旅行～」

今年度の特別展は…“ 川” です！

豊田市郷土資料館では、毎年１回特別展を開催しています。今年度は “川” をテーマに、特別展「すすめ！タイム川ベラー～とよたの川へ時間旅行～」を開催することとなりました。

“川” というと、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？豊田市の中央を北から南に流れていく矢作川、逢妻女川・男川、夏の鮎釣り、子どもの頃家の近くの小川で遊んだ思い出…、色々な思い出がある人がいれば、まったく川との思い出がない人もいるかもしれません。

川との思い出がある人にも、ない人にも、新しい発見がある展示となるようにと準備をはじめました。

展覧会準備スタート

古来から、川は人々の道として、また食糧調達の場として、暮らしに様々な形で密接に関わってきました。そのことが分かる歴史的な資料を集めていくとともに、川に詳しい地元の方々から子どもの頃の川の思い出を集め、今の川についてのお話をお聞きしてきました。

川の思い出などをお聞きしていく中で、印象的だったのは、川と人との距離。現在、70 ～ 80 歳で、家の近くに川があった方々は、口を揃えて、「子どもの頃は川でよく遊んだ」とおっしゃいました。学校にはプールがなく、川で授業をしたという人も。学校が終わると、みんなで集まって、「川行くぞ！」と声を掛け合い、自前の竹竿で魚をとったり、泳いだり…。しかし、昭和 40 年代以降になると、大きなダムができ、川は生活排水や工場排水などで水質汚濁が目立つようになり、魚が少なくなり、川で遊ぶこともできなくなってしまいます。今でこそ、川はきれいになってきていますが、昔のようには、川と人との距離が近くないと思っている方が多いと感じました。

この距離を縮めるため、現在も川に関する様々な試みが行われています。今回の展覧会では、過去のことだけではなく、未来に向かって、現在行われている取組も紹介していこうと思っています。

とよたの川を旅する「タイム川ベラー」！

釣り以外の方法で魚をとる方法を教えてもらったら、ナマズがとれてしまったり、台風が立て続けに何回も来て、川が増水してしまい、写真撮影に苦労する…などなどハプニングに見舞われつつ、展覧会の準備を進めてきました。５月～７月には、広瀬やな組合の方々のご協力で、大きなヤナができるまでを見せていただくことができました（資料館だより 101 号・102 号参照）。

本展覧会では、現在、身近にあっても遠い存在となってしまった「川」について、「自然」や「人々の暮らし」にスポットをあてて、川を生かし、川に生かされながら人々が生活し、これからも川と共に生きていくことを伝えていきたいと考えています。

開催期間中には、郷土資料館に「矢作川水族館」が登場し、生きた矢作川の魚を展示する予定です。また自然や魚、釣りやダムのことを知ることができる講座も行います。

川の本格的なシーズンとなる春以降に向けて、この冬、郷土資料館で「タイム川ベラー」となって、とよたの川へ時間旅行、してみませんか？

（名和奈美）

会期：平成 30 年 1 月 19 日（土）～ 3 月 24 日（日）/ 月曜休館（ただし、祝日は開館）
開館時間：午前 9 時～午後 5 時（入館は午後 4 時 30 分まで）
会場：豊田市郷土資料館　第 1 展示室・第 2 展示室
観覧料：一般 300 円　高校生・大学生 200 円
※中学生以下、70 歳以上、豊田市在住・在学の高校生、障がいのある方及びその介護者 1 名は無料（要証明書等提示）

＜関連イベント＞

☆ギャラリートーク☆

①教えて！とよたのお魚
新見克也氏（矢作川水族館　館長）
日時： 1月26日（土） 午前10時30分～11時30分
会場：豊田市郷土資料館展示室
申込み：不要（時間までに直接会場へお越しください）

②教えて！とよたの自然
大熊千晶氏（豊田市自然観察の森　レンジャー）
日時： 3月9日（土）午前10時30分～11時30分
会場：豊田市郷土資料館展示室
申込み：不要（時間までに直接会場へお越しください）

☆体験講座☆

教えて！テンカラ大王～釣りの歴史と毛バリ作り～
石垣尚男氏（愛知工業大学名誉教授）
日時：2 月 24 日（日）午前 10 時 30 分～ 12 時 / 午後 1 時～ 2 時 30 分
対象：小学生以上
参加費：300 円（材料費）　定員：各回 12 人（応募者多数の場合は抽選）
応募方法：2 月 4 日（月）（※当日消印有効）までに往復はがきにて（1 枚 2 人まで）
※希望時間「午前・午後・どちらでも」をご記入ください。

☆学芸員による展示解説☆

日時：1 月 20 日（日）/3 月 17 日（日）午後 2 時～ 2 時 30 分
会場：豊田市郷土資料館展示室　　**申込み**：不要（時間までに直接会場へお越しください）

☆バスツアー☆

「潜入！とよたのダム見学ツアー」
矢作ダムの内部を案内していただき、黒田ダム（稲武地区）を見学（外観のみ）します。
日時：2 月 9 日（土）午前 9 時～午後 4 時頃
対象：小学生以上
参加費：100 円（保険料）
※別途特別展入館料（大人 300 円）、昼食代（ダムカレーの場合は 950 円）がかかります。
定員：40 人（応募者多数の場合は抽選）
応募方法：1 月 21 日（月）（※当日消印有効）までに往復はがきにて（1 枚 5 人まで）
※詳細は、展覧会チラシ・ポスターをご覧ください。

往復はがきでの申し込み方法（体験講座／バスツアー）

返信表面	返信裏面	往信表面	往信裏面
□ 〒●●●-△△△△ あなたの住所 あなたの名前　様	＜記入例＞ ①関連イベント名 ②参加希望日・時間 ③参加者全員の氏名・年齢 ④代表者の住所 ⑤電話番号	□ 〒471-0079 豊田市陣中町 1-21-2 豊田市郷土資料館行	※こちらの面は資料館で記入しますので、何も書かないでください。

校庭の隅で静かに見守る「菅沼邦三郎先生之碑」

「菅沼邦三郎先生之碑」が伊保小学校の校庭にあることを私が知ったのは、所属していた豊田市郷土史研究会が、教育委員会から調査委託を受け、平成26年に市内の石造物を調査していた時でした。

明治7年（1874）開校の伊保小学校には、卒業生が寄贈した石造の記念碑がいくつもありました。その中で、学校の旧正門近く（校庭の南）に、高さ2.25m、幅最大95㎝、厚み20㎝の石碑があり、中央には「菅沼邦三郎先生之碑」、左下方に「従４位　山崎延吉書」、裏に「大正11年菅沼先生謝恩会、被教育者一同建立」と刻字されています。

その時の私は、菅沼邦三郎先生について知りませんでしたが、揮豪者の山崎延吉先生については知っていたので、菅沼先生は、保見村で教育関係において貢献をされた方なのかなと思っていました。

いつかは調べたいと思っていたところ、平成29年6月から保見交流館において、「みんなで伝えよう保見の歴史」と題して、歴史講座を開講することになり、講座の内容を検討しました。既に発刊されている「保見町誌」、「豊田市史」、「八草の今昔」（伊藤重男著）、「石粉の道」（広幡町山本龍夫著）といった本を中心に、地域に埋もれている過去の出来事、生活文化、娯楽、そして既に忘れ去られている地域の歴史を取り上げようと思っていたことから、「菅沼邦三郎先生之碑」について調べることにしました。

早速、伊保小学校の小泉校長に、この思いをお伝えするとともに「伊保小百年記念誌」を見たい旨をお願いしました。記念誌には、教え子などからの投稿記事があるのではないか、あれば、そこに何かヒントがあるのではと思い、胸を弾ませながら記念誌を閲覧しました。

思った通り、記念誌には菅沼先生について掲載されていました。「第15代校長　菅沼邦三郎氏　在任期間は明治40年6月～大正5年3月」とあり、菅沼校長の顔写真と「菅沼邦三郎先生之碑」の写真及びその碑の説明文「大正11年5月建立、教え子たちが先生の遺徳をしのんで建てた。先生は在職も長く、子どもに大きな影響を与え現在に生きている。」と記されていました。

そして、昭和48年（1973）11月3日の記念誌発行当時にご健在であった教え子の鈴木志づえ氏（明治44年高等科卒）からは「菅沼先生の思い出」、八木茂雄氏（明治44年尋小卒）からは「菅沼先生の追憶」と題して投稿されていました。

以下、投稿の一部を紹介します。

・先生は、厳格で怖い先生でしたが、優しいところも多分にあり、多くの生徒から尊敬されていました。私たちはお父さんのようにお慕いしていました。（鈴木志づえ氏）

・先生は、厳格な教育、そして優しい中にも短気なところがあった。「暴力は人間の最低の悪事」であり決して暴力をしてはならないと言っていた。菅沼教育の特徴として、常に先生が言っていたことに「“目標を定め精神力を打ち込み努力に努力を重ねれば何事も必ず成功するものである”と強調されました。」この教訓を実践したものが多くありました。

「菅沼邦三郎先生之碑」を建立後は、我々明治32年生まれの「三二会」の同級生は、毎年1月15日（成人の日）に「菅沼邦三郎先生之碑」の前で新年の挨拶と旧年中の御加護の御礼及び本年の御加護を祈願申し上げました。その後は、同級会を催しお互いの親睦を深めておりました。本年（昭和48年1月15日）で第29回目となりました。回顧するに後輩諸氏が続々成功しつつあるのを拝察し、諸先生方と社会に対し深甚なる感謝を申し上げます。（八木茂雄氏）

教え子の投稿の内容から菅沼校長が当時、旧高橋村の寺部から素足にワラジで歩いて登校されていたことがわかりました。私は、もしや現在の菅沼医院が菅沼校長のお宅ではないかと思い、平成29年にお宅を訪問し、お話を伺いました。

結果、菅沼校長は現在の管沼医院長の祖父であることがわかりました。また、菅沼校長は小学校への通勤の途中で転倒して胸を強く打ち、それが原因で胸を患い、大正 10 年（1921）12 月に 50 歳の生涯を終えられたこともわかりました。

そして、菅沼医院長は、伊保小学校校長時代に祖父が教え子に慕われ、大きな影響を与えたようであったこと、没後の翌年に教え子たちが「菅沼邦三郎先生之碑」を建てたということをご存じでした。今から 40 年位前に一度、教え子から声がかかり、会に参加したことがあったそうです。

私は、菅沼校長には教え子たちから慕われていたこと以外に、知られていないことがあるのではないかと、校長時代の菅沼家の様子をお聞きしました。

当時は、総じて庶民の生活は苦しく、ままならない状況であり、家庭が貧しくて小学校へ行きたくても行けない子供がいたそうです。そのような家庭の子供を常に 2 ～ 3 人預かり、寝食をともにして近くの小学校へ通わせていたという教育者としての強い信念を貫いていたことを菅沼医院長は母親から聞いていたそうです。10 年間勤務していれば、そのようなことは、いつかは地域住民にも知られていたのではないかと推測されました。

明治 5 年（1872）の学制公布以降、豊田市でも多くの人が教員となり、地域の小学校に勤務されました。菅沼校長のように児童の健全な育成、人格の形成のため職責を全うし、多くの教え子や地域から慕われた先生がお見えになり、その追憶と感謝の気持ちを、当時の教え子が次世代に伝えようと記念碑を建てたことを思うとき、私たち保見地区の住民としては必ずこのことを後世に継承しなければならないと思いました。

10 年に及ぶ長きにわたり伊保小学校の校長として、献身的に教育に尽くしてこられた菅沼邦三郎先生は、今も校庭の片隅で昨今の教育、社会などの世の中の移り変わりを静かに見守っておられることでしょう。

（とよた歴史マイスター　篠田修）

第 15 代校長　菅沼邦三郎先生
（「伊保小百年記念誌」より）

菅沼邦三郎先生之碑（大正 11 年建立）

博物館の種（たね）

博物館はどんなところ？

仕事柄、博物館についてお話しすることがあります。私自身は、「実物・標本・記録などを収集・保存し、資料そのものやそれらが生まれた環境について調べ、展示などを通じてその意義を発信し、後世に受け継ぐための場」と説明します。でも、この説明では、博物館が目指す自由な学びや、それを実現するための多様でユニークな取組が、伝えきれていません。

実際に博物館を訪れると、収集・保存や調査・研究、展示・公開のほか、生涯学習・学校教育や交流、福祉や観光など、館により重点が異なることに気づきます。施設・活動の内容は、博物館が立地する地域の事情や要請を踏まえ、設置者がどのように考えるかによる部分が大きいのです。

博物館のルーツ

博物館が生まれた背景には、様々なモノを通じて世界の成り立ちやヒトの来し方行く末を知り、より良く生きたいという考え方があると思います。

博物館のルーツ、ヨーロッパでは、15 ～ 18 世紀頃、世界各地の自然物や人工物で飾られた「脅威の部屋」という部屋を居城に設けることが流行しました。ヨーロッパの城館を訪れると、遠く東アジアで製作された磁器や漆器などに出会い、広い世界に対する旺盛な好奇心を実感します。「脅威の部屋」は、博物館のルーツと考えられています。

日本で探してみる

では、日本ではどうでしょうか。文化財や歴史資料が所蔵される寺院や神社は、元祖 博物館と言えるかもしれません。しかし所蔵されるモノは、宗教活動を理由として存在しており、興味や好奇心という視点と少しずれる気がします。

興味や好奇心を視点に考えると、私は、茶室・茶会という場・行為を思い浮かべます。茶道具には、茶を飲むための道具や、床間の飾りなど様々なモノがあります。その製作地は、日本だけではなく朝鮮半島・中国・東南アジア・ヨーロッパにまで広がり、また同時代的なものだけに留まらず、数百年以上古い時代のモノを用いる場合もあります。様々な由来の道具を収集・所蔵し、時宜や意味を配慮し道具立てを決定する亭主は、博物館で例えれば学芸員のような役割を担います。

モノを通じたヒトの交流

茶会は喫茶とそれを通じた交流に目的があり、用いるモノも個人の所有物となるので、博物館と同一視できません。しかし、亭主の揃えた道具立てを観賞し、その印象について会話をすることの由来を考えると、モノに対する根源的な興味や関心の存在をうかがわせ、日本版元祖 博物館候補と考えることは、的外れではないと思います。

また、単にルーツとして評価できるだけではありません。会ごとに亭主と客の役割は、随時変化します。私は、自身の学びや考え、研鑽の成果をお見せしあうという、先人が生み出した茶会の互酬的な関係性は、博物館の自由な学びを考えるヒントになると考えています。

“博物館の種”を探して

2018 年は、新博物館整備の周知や意見聴取のため、102 号でご紹介した取組のほか、「ミズベリングフェスタ」（6 月）、「矢作川感謝祭」「ハイブリッド文化祭」「産業フェスタ」（9 月）などへ出展し、3 千人以上の方々にご参加いただきました。

いただいたお声から、ＡＩやＶＲといった仮想現実が浸透しつつある現在においても、モノへの関心は尽きないものであることを実感しました。

また、他の出展・出品者の方々の姿や取組から学ぶところも大でした。それぞれの市民や企業の方が大切にするモノやコトは、本市において生み出される歴史や文化の一つで、それを広く発信・共有したいという考えは、新博物館の使命とも重なります。

「博物館はどんなところ？」という問いに、未来の私たちはどう答えるのでしょうか。近年の博物館の変化を念頭におけば、未来の姿は、今と変化しているはずです。“未来のまち”を支える博物館を生み出す“種”は、先人の営みや現在のまちの中にも、あるのかもしれません。

（髙橋健太郎）

幕府から渡辺家への書状

絹本著色渡辺半蔵守綱像
〈愛知県指定文化財〉守綱寺蔵

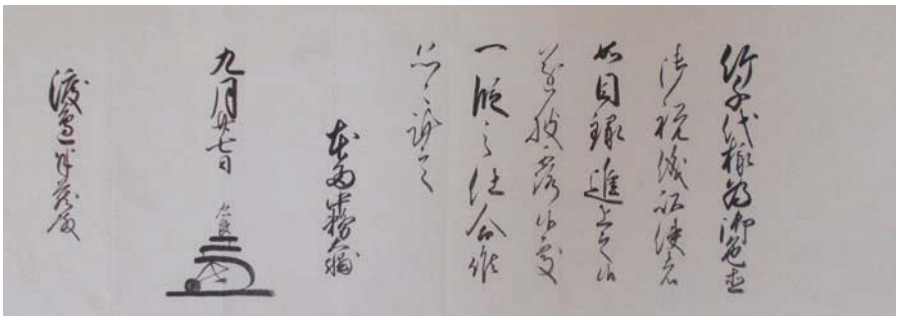
江戸時代、現在の寺部町周辺は、徳川家康の家臣・渡辺半蔵守綱を初代とする渡辺家が治めていました。守綱は、天文 11 年（1542）に三河国の浦部（岡崎市）で生まれ、16 歳で家康に仕えました。今川氏真軍との三河国八幡の戦いや、遠江国掛川城攻め、武田信玄軍との三方原の戦いなどで武功を挙げ、長篠の戦い、小牧・長久手の戦いでの雄姿は、「長篠・長久手合戦図屏風（浦野家旧蔵）」（豊田市郷土資料館蔵）に描かれています。守綱寺に伝わる「絹本著色渡辺半蔵守綱像」に描かれている南蛮胴具足は、家康から拝領したものです。

家康に仕え、徳川十六将にも数えられる守綱ですが、天下統一後には、家康より尾張藩の徳川義直へ仕えるよう命じられます。同様に尾張藩の付家老となった尾張国犬山の成瀬家や美濃国今尾の竹腰家に次ぐ、尾張藩の重臣となりました。領地は、家康より拝領した三河国（寺部村はじめ 17 村）・近江国・武蔵国と、義直から拝領した尾張国とを合わせて、１万４千石を有しました。

そのような経緯があって、渡辺家は将軍家と尾張藩の両方に仕える家柄となり、陪臣でありながら、将軍への拝謁も許されていました。今回、市民の方より寄贈いただいた資料も、渡辺家と将軍家のつながりを示す資料です。将軍家に慶事があると、渡辺家は祝儀を贈り、それに対して、老中などからお礼の書状を受け取っていました。このような書状は、老中が将軍の代わりに出しているもので、老中奉書などと呼ばれ、渡辺家宛てのものも多く残されています。以下は、今回寄贈いただいた４点のうちのひとつです。老中本多忠良（本多中務大輔）から寺部渡辺家７代綱保へ出された書状で、綱保が竹千代（10 代将軍家治）の色直し※に祝儀を贈ったことに対するお礼が記されています。

（山田佳美）

※出産後 101 日目に、産婦と赤子が白小袖から色物に着替えること



老中奉書（渡辺半蔵宛）元文２年（1737）

【翻刻】
竹千代様為御色直
御祝儀以使者
如目録進上之候
遂披露候処
一段之仕合候
恐〃謹言
本多中務大輔
九月廿七日　忠良（花押）
渡辺半蔵殿

【読み下し】
竹千代様御色直として
御祝儀、使者を以て
目録の如く、之を進上候
披露を遂げ候処（将軍に披露しました）
一段の仕合に候（幸）
恐〃謹言（恐れながら申し上げます）
本多中務大輔
九月廿七日　忠良（花押）
渡辺半蔵殿

埋蔵文化財調査速報　神明遺跡第13次発掘調査

調査地点：豊田市鴛鴨町

調査期間：平成 30 年 9 月～ 10 月

調査面積：約 120 ㎡

調査概要

神明遺跡は、高速道の豊田ジャンクションの北西、豊田市の南東部の碧海台地が舌状に伸びた部分に立地し、南側～西側は遺跡の最高地点と比べ 9.0m 程低くなっています（図 1）。遺跡の南側では戦前から盛んに土採りが行われましたが、昭和 30 年代に地元の研究者らが周辺で多量の土器や古代瓦を採集したり、土採りの断面で竪穴建物を確認したりするなどし、遺跡の存在が知られるようになりました。

昭和 41 年（1966）には、東名高速道路の建設に伴う事前調査が行われ、弥生時代後期～終末期、古墳時代前期、古墳時代中期～後期、律令期の各時代の住居が確認され、集落の最盛期は古墳時代中期にあったことが明らかとなりました。また、５世紀代にはカマドを持つ住居が多く見られるとともに、古式の須恵器や鉄製刃先が出土していることから、５世紀後半に伝播する新しい生活様式を備えた集落として、非常に重要な遺跡と評価されました。その後も市道の拡幅や第２東名高速道路の建設に伴う事前調査、個人住宅や工場建設に伴う調査が行われ、集落は５世紀中葉以降に居住域が拡大し、５世紀後半にかけて最盛期を迎えることが明らかとなっています。

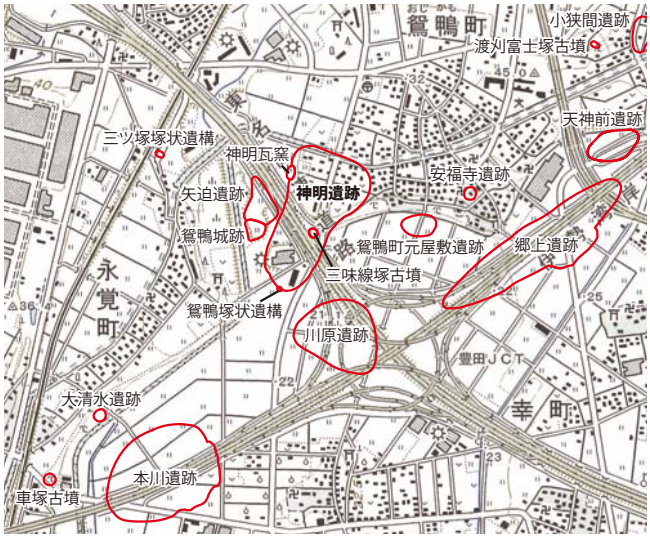


図１　遺跡分布図

今回の調査地点は、遺跡範囲の中央やや北寄りの台地の西縁辺にあたる地点で、西側は 3.0m 程低くなる台地の端となり、台地下には鴛鴨川が南流しています。過去に行われたすぐ東側の調査ではカマドを持つ６世紀後葉の竪穴建物が確認されています。また、北側には神明瓦窯推定地が位置し、瓦葺き建物を伴う範囲も推測されていることから、これらに関わる成果も期待されました。

今回の調査では、台地の縁辺に当たるためか、全体として地山の上面がかなり削られた状況であり、掘り込みが浅い遺構は失われてしまっている可能性があることがわかりました。その影響もあってか、検出される遺構の数は少なく、カマドを持つ竪穴建物１棟を台地の縁辺際で確認したに留まりました（写真 1）。竪穴建物を埋めている土の中からは、土師器や須恵器が出土しています。今後の整理作業の中で詳細な時期について検討をしていきますが、出土した遺物からは５世紀中葉頃の建物であったと考えられます。

以上から、これまでの調査で明らかとなっていた５世紀中葉に遺跡が拡大する状況の一端を確認するとともに、台地の崖線付近にまで竪穴建物が分布していたことが明らかになりました。

（市澤泰峰）

写真１　竪穴建物

鉄瓶 てつびん

鉄瓶は土瓶を模して、茶釜の鐶付に弦をつけ注ぎ口を設けた物だと言われています。囲炉裏や火鉢で、自在の鉤に掛けたり五徳の上にのせたりして飲用の湯を沸かすための道具です。

ほとんど忘れられてしまった道具であると思っていましたら、鉄分が体に良いということで、湯沸かしに鉄瓶を使うひとがこのところ増えているようです。

茶釜　Wφ250　H175　Dφ223

豊田市郷土資料館には、鉄瓶が60点ほど登録されており、それらは実に様々な形態と表情をしています。

鉄器のひとつ“ワタシ”の上で使う鉄瓶　Wφ134　H233　Dφ115

鉄瓶の多様な姿を眺めていますと一つとして同じものは無いように思えます…。それら館蔵品のいくつかを紹介します。

W232　H250　Dφ199

W110　H235　D153

W174　H243　Dφ210

W187　H230　Dφ168

寸法の標記

Wは幅
Hは高さ
Dは奥行き
φは直径
（Hは弦が上がった時の高さ）

龍文堂造り

数多くの登録された鉄瓶の中に、陽鋳や陰刻で銘の入れられたものがいくつかあります。右の写真の鉄瓶は本体は鋳鉄ですが、蓋が銅で造られています。これは京都の龍文堂製の鉄瓶の特徴だと言われています。

W223　H205　Dφ165

龍文堂は江戸末期から昭和33年頃まで、8代続いた鉄瓶屋さんで、初代は蝋を鋳型とする鋳造法を始めた人です。少量の質の高い鉄瓶を製造し評判を呼んだようです。

蓋裏に陰刻

龍文堂の鉄瓶の多くは銅製の蓋裏に陰刻がほどこされた物が多く、胴に陽鋳が入った物は少ないと言われています。このことが、人気の出た龍文堂製鉄瓶の贋物造りに好都合となり、龍文堂造の陰刻を入れた蓋だけを上手に置き換えてやれば、どんな駄物の鉄瓶も龍文堂製とすることができてしまいした。

胴に陽鋳

銅壺と長火鉢

長火鉢にしつらえた銅壺の湯のなかにチロリを入れ、お酒の燗を付けました。引出しには、海苔とか刻み莨、付木などを入れておくと乾燥して具合よく保存ができました。

本体には「こがね　五徳」の陽鋳があります。

蓋裏に陰刻

（東海民具学会 岡本大三郎）

企画展紹介

古い道具と昔のくらし 物語と民具

現在でも、絵本や国語の教科書をはじめ、わたしたちが昔話や民話、創作童話に触れる機会は多くあります。しかし一方で、そんな物語の中に出てくる人々の暮らしや道具がどんなものだったのかを見たり体験したりする機会は少なくなっています。今回の企画展では、「かさこじぞう」をはじめ、馴染みのある物語に登場する道具に着目して、日常生活に密着した道具（民具）と、それらが使用されていた暮らしのようすを紹介します。

「かさこじぞう」　イラスト協力：山本たかこ

物語に出てくる道具“米俵”

実演

挙母木綿伝承会による
糸紡ぎ（いとつむ）・機織（はたお）り実演

平成 30 年 12 月 22 日（土）
午前 10 時～正午
参加費無料・申込み不要

冬休み子供向け

中央図書館スタッフによる
物語（ものがたり）の読（よ）み聞（き）かせと展示解説（てんじかいせつ）

平成 30 年 12 月 26 日（水）、27 日（木）
午後 1 時 30 分～
参加費無料・申込み不要

ギャラリートーク

物語の紹介とギャラリートーク

平成 31 年 2 月 2 日（土）、3 月 2 日（土）
午後 1 時～
参加費無料・申込み不要

会場の民俗資料館（豊田市郷土資料館敷地内）は、江戸時代の民家を移築したもので、土間やイロリなどの空間を活かしながら展示を行います。また、会場内では十二支やひなまつりなど、季節毎に変わる展示コーナーを設けます。

期　間：平成 30 年 12 月 15 日（土）
～平成 31 年 3 月 3 日（日）
休館日：月曜日（ただし祝日は開館）
年末年始（12 月 28 日～ 1 月 4 日）
臨時休館期間（1 月 7 日～ 1 月 18 日）
観覧料：無料
※特別展観覧料は、一般 300 円、高校生・大学生 200 円です。（中学生以下、70 歳以上、豊田市在住・在学の高校生、障がいのある方及びその介護者 1 名は無料でご覧いただけます。）

■豊田市郷土資料館利用案内■

開館時間　午前 9 時～午後 5 時
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
愛知環状線「新豊田駅」より　徒歩 15 分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ　徒歩 5 分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.103
平成 30 年 12 月 11 日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館
〒471- 0079 豊田市陣中町 1-21-2
TEL. 0565-32-6561　FAX. 0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● http://www.toyota-rekihaku.com
FB●http://facebook.com/toyotarekihaku
※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。